
神人な友人

有沢 美弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神人な友人

【Nコード】

N8093F

【作者名】

有沢 美弥

【あらすじ】

中学一年生の美咲は神様を信じていなかった。しかしある日、神社の倉から見つけた首飾りによって神様を召喚してしまった。その神様とは……？

一章・第一話（前書き）

これは「神人な恋人」の続編です。
これだけでも話は分かると思いますが、そちらも読んで頂けると更に楽しめると思います。

一章・第一話

神様…ってよくお祈りする人、いるよね？

それ、あんまり好きじゃない。

『どっつしてっ？』

だってくだらないじゃない。

『そんなことない』

そんなことある。

だって、神様は何にもしてくれない。

『本当に？』

そう。

『じゃあ、行ってあげる。美咲、あなたが望むのなら』

望む…？

これは夢か。

薄い膜に覆われたような、視界と声。

優しい、鋭い。

蒼く、青く。

深い、それ。

『私は信じたいの。神様ってものを』

「じゃあ、信じさせてあげる」

その声は少しだけ、悲しそうだった。

一章・第一話（後書き）

「神人な友人」。
連載開始

もっと「神人シリーズ」を好きになってくださる方が増えればと願っています。

第二話

「っわあっ!」

勢いよくベッドから起きあがった美咲は、時計を見て更に驚いた。

「やっぱ!遅刻する…っ!」

階段を下りて、居間に入るや否や母に向かって怒った。

「母さん!起こしてって言ったでしょ!?遅刻するじゃない!」

「あら。昨日の夜、父さんと喧嘩してふて寝したのは誰かしら」

母の余裕な表情に、美咲はテーブルに置いてあった菓子パンを失敬して自分の部屋にこもってしまった。

「あらあら。また怒らせちゃったわ。でも、お父さんに似て、素直じゃないわね」

沙羅がため息をついて、朝食を取っている夫に目を向ける。

「悪かったな。だが美咲はお前似だって気づいてるか?」

「は?何が」

「靈感」

彼は、コーヒーのカップを置くと沙羅と視線を合わせた。

「知ってる。だって誰かさんの血を引くからね。普通じゃないわよ」

「おい…人を化け物みたいに……………」

「そんなに大差ないわ」

そつえば、と沙羅は夫の隣に座った。

「青斗、あなたの血って同類を呼んだりしないでしょうね」

「は?」

青斗と呼ばれた『夫』は、軽く目を見開く。

「だから、私と同じような運命をたどったりしないわよね」

「神様と…ということか?」

「そつ」

青斗は椅子から立ち上がると、食器をかたしなから言った。

「大丈夫だろう。……多分」

「ちよ…っ…多分じゃ困るわよ……」

沙羅がそう言った瞬間、玄関から大きな声が聞こえた。

「母さん、父さん、行ってきます！」

それを聞いた青斗は、一言。

「充分素直じゃないか」

「ぎりぎりセーフっ…！」

美咲が席に着くと、親友の…というか親戚の若菜が近づいて来た。

「おはよ、美咲。今日はまたどうした？」

「なんでもない……」

若菜の名字は渡辺。

要は美咲と同じ。

そう、沢と和美の子供である。

「ね、今日家に来ない？おもしろいものがあるんだ」

美咲は若菜の誘いに乗り、放課後の予定を決めた。

第二話（後書き）

登場人物こそ新しいですが、なんか愛着ありますねえ…
私だけでしょうか（笑）

第三話

「見て、ほら」

そうやって差し出されたのは、金色の切れた鎖。

「何？これが見せたい物？」

「うん。なんかこれ、すごい強い力があると思わない？」

「そう…かな…」

美咲はそつと触れてみる。

強く、優しい『気』。

「ね？すごいでしょ？」

若菜はにこにこ笑って、続けた。

「父さんのお友達からもらったんだって。え…と、純さんだったかな」

「ふーん…」

美咲はもう一度よく見てみた。

少し錆びていて、それでいて、鮮やかな光りを放っている。

「ね、これ少し借りていい？」

「いいけど…明日には返してよ？」

「うん」

美咲は家の前に立って考えた。

目の前にあるのは、赤い鳥居。

父が神主の美咲は神社の境内の家に住んでいる。

「これと同じ『感じ』。どこかで……」

考えながら、ふと物置に入ってみた。
いつもだつたら絶対入らない場所。

「あれ？こんなのがあったっけ」

倉庫の床に、捨てられたようにあったそれ。
それは、首飾り。

金の鎖にトツプは星の紋。

かがんで拾い上げた瞬間、気づいた。

「これ…だ…」

同じ『気』だ。

切れた鎖と同じ『感じ』。

「なに…裏に何か文字…:…?」

暗い倉庫ではよく見えない。

でも、確かになにか書いてある。

しかし美咲は他の『言葉』を口走った。

それは知らぬはずの呪。

「東の地あづまに馳あそせし龍神よ、蒼あおの色いろを持つ神よ、四神よかみの主ぬしである我に
神を使つかわせよ。出陣・青龍」

言った後で、美咲は瞳を見開いた。

「……え」

これは、なんだ。

「わ…っ…!?!」

突然、倉庫の中に突風が起こる。

美咲はきつく目を閉じた。

「主…ね。そもそも神様なんて信じてないあなたが、どうして私の
主ぬしなのかしら」

聞き慣れない、アルトだった。

恐る恐る目を開いた美咲は我が目を疑った。

「だ…誰…:…」

「なに。自分で呼んでおきながら」

それは、華奢な少女。

濃色な短い青の髪。暗がりでも解る、蒼の瞳。袖の無い着物に丈の短い着物。

全て青で統一されている。

おそらく青以外受け付けられない少女だった。

「あの…だれ…？」

美咲の再度の問いに、少女は微笑して答えた。

「青龍」

美咲と歳はさほど変わらないであろう外見。だが、何か圧倒する威圧感。

「せ…青龍…？」

「そう。だつて呼んだでしょ？私のこと」

「もしかして………」

あのネックレスが、これの引き金か。

第三話（後書き）

青龍第二号誕生。

呼び方がややこしくなる…

第四話

「青龍。知らないなんて言わせないわよ。『四神』くらい知ってるでしょ？」

「知って…るけど…何で…主て…」

状況が飲み込めない美咲は夢かも知れないと頬をつねってみた。痛い。

「何してるの？」

不信気に聞いてくる青龍は、美咲にネックレスをずいと差し出した。受け取れと無言で訴えている。

「受け取ってくれないと困るわ。主が、必要なの」

「どうしたの？」

家に入る否や、母が美咲の顔をのぞき込んで来た。

「え…。なんでも、ない…」

「そう？」

あまり深く追求しないほうがいいと考えたのか、沙羅は台所に戻っていった。

美咲はそのまま自室に行った。

「なんで、かなあ…」

もう一度、例のネックレスを見る。綺麗な。

だが、それ以上に重く感じられた。

『探してる人がいるの』

青龍はそう言った。

『私の大嫌いな人』

『じゃあ探さなきゃいいじゃない』

しかし、青龍は頭を振った。

『駄目。気が済まない』

そう言った彼女は泣きそうだった気がする。

暗い倉庫では分からなかったが。

「どんな人かな。探してる人」

美咲は天井を仰ぐ。

『大嫌い。でも、好きなの』

あの少女が…

と言ってもまだ数分しか話したことのない少女だけれど。

それでも、そんな気がする。

きっとあの少女の心は強い。

「探してあげたいなあ…」

素敵な人なのか…

「でも、大嫌いって…」

分かる気がする。

好きだから、恨まなくてはいけないこと。

好きだから、嫌わなければならぬこと。

好きだから、どうしようもないこと。

きつとある。

「青龍、悩んでいたんだろうなあ」

第五話

「美咲っ！起きなさい！」

「……………へ…？」

朝。

いつものまにか寝ていたようだ。

外ではせわしなく鳥が啼いている。

「お母さん…？」

まだ、ぼんやりとしている瞳で沙羅を見る。

「大丈夫？」

「多分…でも、熱っぽい……………」

「え？」

沙羅が美咲の額に手を当てる。

そして、目を見開いた。

「美咲、今日は学校休みね」

「ええ！？」

びつくりしてベッドから体を起こそうとする。

しかし、腕に力が入らずがくりとおれてしまう。

ふらふらする。

「昨日何か無茶しなかった？」

「……………してない」

「そう…」

そう言っつて沙羅は部屋から出て行った。

残された美咲は、ぼんやりとした視線で天井を見つめていた。

ふと思立ったように胸に手をあてた。

しやら…と鎖が鳴る。

「夢じゃ…なかったんだ……………青龍」

「何？」

「ええっ!?!」

横を見ると、少女が立っていた。

昨日と変わらない姿で。

「あーあ。熱が出たのね。じゃあ、手っ取り早くなおそうか」

「え…?青龍、何言ってる…」

「美咲」

「はい?」

名前を呼ばれた美咲は黙った。

「青龍って呼び方、止めない?『青華^{せいか}』って呼んで」

「青華?」

「そう。私が神様になる前の呼び名。みんな神様は持ってるのよ」

美咲はゆっくりと起きあがると、青龍 青華を振り返った。

なおせるの、と小さく呟く。

「たかが熱だけだね。じゃあ、それ。握って四神の方の名前を呼んで」

青華は美咲の胸元を指して、言う。

それがネックレスだとすぐに気づいた。

「分かったわ」

そうして。

「青龍……」

瞬間。

「っわ!!」

体が中に浮いたような感覚に捕らわれる。

しかし、すぐに足が地に着いた。

「大丈夫?」

すぐ近くに青華が立っていて美咲の腕を引っ張り上げた。

「あ、ありがとう……」

熱とさっきの感覚でふらふらした足取りで立ち上がる。

そこは、霧のように白かった。
夢のように。

「おーおー。青龍、お前の主か」
不意に背後から低い声が聞こえた。

振り向くと、銀髪の青年がからからと笑っていた。

「あの…あなたは？」

「儂か？玄武じゃ」

「玄武…って四神の？」

「おお。知っているか」

そう言った玄武はひよいと美咲を抱き上げた。

「なっ！」

驚いたのは美咲だけではない。青華も同じように驚いていた。

「玄武、何してるのよ！」

「美咲は熱があるんじゃない？歩かせるのはよくないぞ」

そっぴえば、と美咲は大人しく抱かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8093f/>

神人な友人

2010年10月9日02時17分発行